

文字文化財研究所の今年度の活動実績と計画

文字文化財研究所長 犬飼 隆

本年度は、研究所の構成員に、愛知県立大学日本文化学部教員と、本学名誉教授で客員共同研究員の野崎典子氏に加えて、四人を新たに迎えました。もと愛知県立高校教諭で城山三郎の研究に携わる山下達治氏と、本学大学院博士後期課程を満期退学した狩野一三氏、熊沢美弓氏、鈴木喬氏です。若い気鋭の三人は研究所の活動を日常的にささえながら自己の研究をすすめております。研究所に連絡をいただいた際にお返事できる機会が多くなったかと存じます。

本年度の主要な活動実績は以下のとおりです。荻野検校顕彰会との連携による平曲の普及・研究の活動として、六月に名古屋市西文化会館において第十八回平曲演奏会を行いました。十一月には、愛知県立大学学術文化交流センターを会場として、「平曲シンポジウム 譜本としての『平家正節』——荻野検校の整譜事業が遺したものは何か——」を開催しました。荻野検校顕彰会が文化庁の平成二三年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「平曲演奏家の育成に関わる基盤整備事業」を得て行った催しです。文字文化財研究所が運営を担当して共催が実現しました。新任の若い三人の所員が、準備と当日の進行に県立大学の大学院生の協力を得ながら活躍しました。参加者約五十人でした。名古屋女子大学教授林和利氏の司会のもとに、新潟大学教授鈴木孝庸氏、武蔵野音楽大学教授薦田治子氏、早稲田大学文学学術研究院教授上野和昭氏の講演、名古屋大学名誉教授山下宏明氏、国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長藤井知昭氏、平曲研究所代表鈴木まどか氏のコメントをいただき、充実した会合になりました。内容は本誌の記録を御覧下さい。会の終了にあたり、荻野検校顕彰会代表尾崎正忠氏から、かつて愛知県立大学は、高木市之助先生を中心にして平家物語と平曲研究の一大拠点であり、その地で今回のシンポジウムを開催した意義と述懐が述べられました。本年度の活動にもう一つの画期がありました。「県大講座 あゆち」をはじめたことです。文字文化財研究所設立趣

旨に「良き文字文化財を理解し継承・発展させていく人材の育成」「他の教育研究機関、学校等と協力して、専門知識をもつ人材のバンクをつくり、派遣できる体制をつくる」と掲げています。かねてから諸方面と相談しながら具体的な活動形態を模索していましたが、愛知県総合教育センターや県教育委員会関係者のお教えを得て、高校教育の研修講座を実施する計画をたてました。「高等学校の授業実践に関わる研修を実施し、現職教員および教員志望者の教科に対する指導力の向上に資する」という趣旨です。第一回は八月十七日に愛知県立大学名駅サテライトキャンパスを会場にして教員をめざす県大生を含めて全体で約三十人の参加を得ました。講師は研究所員の山下達治氏に依頼し高校教諭の経験をもとに源氏物語を教材として取り扱う模擬授業の形で講演をお願いしました。参加された先生方からの好評をいただいて、今後、年に二回程度開催することとし、第二回を十二月二十三日に同じ会場で行いました。講師はもと県立高校教諭で短歌の実作者としても研究者としても名高い鈴木竹志氏をお迎えしました。来年度から県の教員になる学生三人を含めて二十五人の参加があり、模擬授業のあと活発な議論を行いました。なお、国語科以外に英語、地歴でも、との御意見をいただき、実現する手立てを外国語学部的高等言語教育研究所とも相談しながら検討中です。

また、本誌第三号の活動実績と計画に書きましたとおり、本学名誉教授の尾崎知光先生から国語学史関係の貴重書を御寄贈いただき、研究所として目録・解題の作成をすすめてきましたが、おおよそめどがつかしました。その最初の成果を本誌に掲載しております。本学図書館と連携して所蔵の貴重書を調査・研究し展示する活動も続いています。十二月十四日に狩野氏と熊沢氏が学内講演「古俳書調査の方法」を行いました。科研費によるプロジェクト「戦に関わる文字文化と文物の総合的研究」との連携活動は、十二月四日の公開国際講演会「日本とイギリスの城と町―戦を経て変わる景観、受け継がれる景観―」が掉尾を飾りました。内容は、クイーンズ大学准教授キース・リリー氏「Castle-towns and conquerors: urban landscapes and their shapers in medieval Britain and Ireland, 1066-1307 CE (城下町と征服者: 中世イギリスの都市景観とその形成者たち)」「奈良大学教授千田嘉博氏「城郭の比較考古学―日本・アジア・ヨーロッパ―」愛知県立大学准教授山村亜希氏「戦国都市から近世都市へ―尾張における城下町の「かたち」とその変化―」の講演と愛知県立大学教授中島茂氏のコメント「近世都市大阪の近代―軍・官・民による産業化と都市化―」です。愛知県立大

学術文化交流センターで、百十人の参加を得て意義深いものになりました。所員個人による調査・研究活動も継続中です。本誌に掲載された山口俊雄・橋本明共著論文は、本年報第一号に「小酒井不木文庫（愛知医科大学図書館）の調査・研究と大学教育への反映」として掲げられた活動目標の具体的な成果です。名古屋市蓬左文庫、三重県の斎宮歴史博物館はじめ、県内外の各種教育機関・研究機関等との連携も継続しています。

研究所として県内外の文献・文物、文化活動の所在を調査し、情報化して全国に発信する活動も継続中です。文献・文物そのものを研究所として図書館とは異なる観点から収集する活動も続いています。今年度は、放送界の重鎮として昭和年代末期に名古屋における平曲講演の多くを主宰された大脇明氏から、御所蔵の貴重な平曲LPレコードと当時の演目案内冊子を研究所に御寄贈いただきました。研究教育に役立てるようにとの御趣旨です。平曲に関しては、東京の平曲研究所とも友好関係を結び、刊行物などの寄贈も受けています。県大に行けば他にない貴重資料が閲覧できる状態の実現をめざしています。

最後に、二年後に計画している大きな活動をお知らせします。名古屋市博物館と共催で、平成二十五年の冬に、発掘された古代東海地方の文字資料を中心とする展示を行う計画ができました。この企画は、名古屋市立大学人文社会学部、愛知大学文学部をはじめ、東海地方のいくつかの大学の教員と共同で実施する目論みです。名古屋市博物館と協議したときに、古代の文字についての学びをとおして「小、中、高校生に夢を与えるような企画」にしたいと合意しています。また、「展示の実施に学生が参加すること」を考えています。もし計画が実現して、大学のもつ専門知識を社会に提供する役割を果たすことができ、しかも、それが次世代をなう子どもたちと現に大学に在学する学生たちの教育に還元されるなら、幸いこの上ありません。

当研究所の活動費は愛知県立大学学長裁量費から配分を受けています。愛知県立大学全体が掲げている「魅力あふれる大学づくり」を実現するための費用です。学部とは別の立場から、大学のもつ知を社会に還元する活動です。来年度は研究所の運営体制をいっそう整えて、内容をさらに展開します。引き続き、皆さまの御支援を乞います。